



# アイヌの衣服と工芸

アットウシ衣をつくるための布を織る奏憶廬。『蝦夷島奇観』19世紀初頭（個人蔵）

アイヌは、自分たちが使う衣服や生活用具を製作する技術を習得することで、一人前の人間であるとの評価をされてきた。したがって、女性は、日常生活を営むに必要な衣服をつくる技術のみがき、男性は、毎日の食生活に欠かせない木製の調理用具、それに食物を盛る容器や狩猟・漁撈の用具など、木工の技を持つことが求められた。つまり、一人前として結婚を許される娘であれば針仕事の手さばきが良ければ、家事全般を任せられる能力を身につけたとみなされるのである。また青年であれば、木彫り細工に熟達した技を持つていけば、狩りの道具をつまづくくり、獲物を確保して食生活や経済を支えられるとされたのである。

地域ごとに例を挙げれば、北海道アイヌの代表的な伝統衣服であり、自家製の織物であるアットウシ衣は、素材の入手から靱皮繊維の加工さらに布に織り衣服に仕立て、そこに切伏せや刺繍によってアイヌ文様で装飾する工程すべてを妻や娘が行った。またサハリン（樺太）アイヌを代表する伝統的な衣服は、イラクサの繊維を織ったテタラベ衣やサケ、マスの魚皮をなめして縫い合わせた魚皮衣であり、これらの製作も女性の仕事であった。

また、千島アイヌの伝統的な衣服は、鳥皮衣で、これは主としてトトリカソメドリの皮付きの羽根を縫い合わせたものである。このように、アイヌはそれぞれ居住する土地で得られる素材をたくみに加工し、衣服に仕立て、地域的な特色を持った文様で装飾を施している。したがって、文様をみれば、北海道のどの地域のものである程度明らかになる。個人の独創性が盛り込まれたみことな文様装飾の衣服もあるが、地域的な規範の枠を超えるものは見られぬ。

アイヌ文様は、渦巻き文であるモレウと、括弧文のアイフシの二つのモチーフが基本単位であり、シンメトリーに配置されることが多い。このように文様を施すことは、華やかな装飾性を表現すること

も、その施文部位を刺し子のよう



北海道アイヌの切伏せを施した木綿衣（部分）

に丈夫にする効果もある。そしてまた、施文された箇所は、この文様によって、悪霊の侵入を防ぎ、病魔にとりつかれまいとする意味をも込められているとされている。例えばアットウシ衣をはじめ、外来の木綿地を基本とした各種の衣服には、襟、袖口、背中、裾回りなどに文様が施され、衣服自体を、自己の身体と外部世界を隔てる可変性の容器とみなしていると考えられるであろう。これを裏付けるといえる例が鳥皮衣でも見られる。鳥皮衣の羽根が生えた方を表とすれば、その裏側には、極めて呪術的といえる装飾が施されているのが一般的である。背中の部分には、足の水かき部分の皮や、肛門部の皮を5羽から10羽分ほど並べて貼り付けている。これは、足や肛門といった活いとされる部分が悪霊を寄せつけないとする考えに基づいたものである。

アイヌの衣服には、すでに述べたもの以外に、獣皮衣や草衣などが19世紀前半まで用いられていた。アイヌの衣服は、仕立てた着物の上に裂り割いた布をテープ状に張り付けた切伏せ文や、全体を刺繍でかざったもの、あるいは切伏せと刺繍を併用した文様構成のものなど、豊かな色彩と巧みな造形が見るものを惹きつける。アイヌの衣服を他者が見て瞬時にアイヌのものである、しかもそれが北海道であればどの地方で作られたものか、また時代の特徴などを読み取ることができるとは、第一にアイヌ文様のモチーフと構成に よってである。



北海道上川地方のアイヌの盛装。杉村満・フサ夫妻。



サハリンアイヌのイラクサ製のテタラベ衣 (サハリン州郷土博物館蔵)



千島アイヌの鳥皮衣 (複製・国立民族学博物館蔵)

の表現に使われる布地の量は増加し、やがて衣服全面を白地の布で覆う木綿衣(カパラミツ)が創造され、さらに色糸なども多量に入手可能になったことよって衣服全体を刺繍で埋め尽くした木綿衣(チチリ・チンチリ)などが多様な展開を見るに至ったのである。

アイヌ文様がいつの時期にどのような背景を持つて生まれたかを確定することはできないが、筆者はその時期を、考古学的資料から13〜14世紀頃と考えている。つまり、このアイヌ文様の出現の背後には、中国や日本を軸とした東アジアの商品経済の波動が、アイヌはおろか周辺地域の先住民世界に及んだ結果、先住民は商品生産に対応する民族的な性格の集団を編成していった。そしてそれぞれの集団に、我々意識つまり集団としての帰属意識が必然的に不可欠のものとなる中で、そうした集団としてのアイデンティティの表象として、それぞれの先住民が特色を持った装飾文様を創造していった。

アイヌの衣服も、歴史的に見ると、獣皮衣、魚皮衣、鳥皮衣などが最も古い様式であるが、およそ10世紀頃より、北海道島のブレ・アイヌ文化(擦文文化)の人たちが、機織機を使用してアットウシ布を製作し始めたことが、天塩・豊富遺跡などの発掘調査によって明らかである。このアットウシの衣に、本州産や大陸産の木綿などの布類が切伏せされるようになるが、現存する資料で年代の確かな古い資料は、1798年に木村謙次が虻田近辺で手に入れたものである。この衣の切伏せが紺地のみで、そのわずかな量の木綿布の使われ方から見ると、18世紀頃から切伏せの施文が本格化した可能性がある。その後、19世紀初頭より、アイヌ文様の

明治政府の成立によって北海道に開拓使が1869(明治2)年に設置され、それまで蝦夷人、アイヌ人などと呼んで、異国人扱いをしていたアイヌを、国民として国に囲い込み、戸籍上も旧土人と呼称を統一し、アイヌに対する同化政策を強力に推し進めた。また、入れ墨や耳飾りの禁止など、アイヌの風俗を日本風に改める政策のもとで、当然、アイヌの伝統的な衣服を日常的に着用することは困難になった。しかし、1880〜1890年代にかけてアイヌ観光が活発になり、そこで見物客が期待したイメージである、原始生活を演出する道具」として不可欠である衣服をはじめ、工芸技術や儀礼は皮肉にも観光化現象の中で持続された。

1970年代頃から世界的な規模で、先住民による奪われた土地や資源および諸権利の回復をめざす運動が盛んになった。その潮流はアイヌの民族的権利回復と文化の再生を目指す運動を活発にし、アイヌ自らが国際社会の場で権利回復を訴える努力をし、同時に工芸など、「もの」作りを通して、アイヌ民族の存在とその文化をアピールする作家が数多く活躍するようになった。1989年には200年前の記録をもとに大きな積載量を持つ交易船イタオマチフを復元したり、国連が1993年に設定した国際先住民年には、筆者の勤務する国立民族学博物館では「アイヌモシリ 民族文様から見たアイヌの世界」展がアイヌとの共同作業で開催された。さらに加えて、1997年にはいわゆる「アイヌ文化振興法」が制定され、アイヌの言語や工芸や儀礼など、さまざまな文化継承の事業が行われ、成果を生み出しつつある。

工芸の面で見れば、伝統的な衣服作りの技術を次の世代に伝える取り組みは、着実に成果をあげているといえるだろう。すでに日常着ではなくなったアイヌ文様で飾られた伝統的な衣服が、例えば国や道が継承を支援する国指定重要無形民俗文化財の「アイヌ古式舞踊」のような

限られた場で用いられるばかりでなく、現代的なセンスを盛り込んで多様にアレンジした作品も生み出されつつある。

さらに国際的な先住民会議などにおいて、その存在をアピールするためにアイヌの伝統的な民族衣装を着用して会議に臨むなど、アイヌ自らの手で積極的な利用がされ始めている。



現代の木彫作品(貝澤 徹作)



北海道アイヌの木盆

国立民族学博物館 教授

大塚 和義